

(3. 共同研究班活動報告)

3-7. 「表象と現象から読み解く－恐怖と不安定性－」

研究班 活動報告

加藤 仁彦・中村 健太

1 研究会発足主旨

「表象と現象から読み解く－恐怖と不安定性－」研究班設立の目的は、現代日本における恐怖と不安定性を、表象と現象という両側面から検討し、いかにして社会的に理解可能か、また社会的な知に貢献可能かという点を研究することにある。

表象としての恐怖とは、メディアを通じて消費される恐怖を意味しており、設立当初はホラー映画・小説・漫画を、そして、現象としての恐怖は、日常生活の中に潜在し隠蔽されている恐怖を想定していた。これらの表象と現象を反復的に検討することによって、我々は何に恐怖するのか、そもそも恐怖するとはどういうことなのか、という点を明らかにすることこそが、本研究班の第一の目的であった。

しかし、勉強会の進展と共に、恐怖それ自体がもつ不安定性という新たな論点が浮上することになる。つまり、恐怖とは非常に不安定なものであり、「恐怖／不安」「恐怖／笑い」といったように、直観的にそれらを峻別し分類することは、実は非常に難しいのではないかと、ということである。

ホラー映画・漫画に典型的であるのだが、そこで示される恐怖はともすれば不安や笑いに転ずる可能性を多分にもつ。例えば、『ヒトラー～最期の12日間～』（原題：Der Untergang）という戦争映画を取り上げてみよう。本作は、1945年4月末のドイツを、つまり敗戦直前のドイツを舞台としている。そこで、ヒトラーとその周りの人物が、敗戦という差し迫る未来に対してどのように向き合っていたのか、という点が描かれている。ヒトラーは敗戦後の自身の扱われ方に恐怖し、自殺を決意するのだが、その自殺に対しても恐怖を抱き、確実に即死する方法を部下に訊ねている。

と、映画の簡単な紹介を行ったのではあるが、実はここで一つの問題を提起している。それは、上記の紹介文中の「恐怖」という言葉を、「不安」に置きかえることが可能だという点である。「ヒトラーは敗戦後の自身の扱われ方に不安し、自殺を決意するのだが、その自殺に対しても不安を抱き、確実に即死する方法を訊ねている」としても、一見すると意味が通じてしまうのだ。

一般に精神医学による分類では、恐怖には具体的な対象があるのに対し、不安にはそのような対象がないとされている。例えば、「将来が不安だ」といったように、漠然としたものには不安が、「高い所が怖い」といった場合には高所恐怖症といったように恐怖が適切であるのだ

と。しかし、対象の有無に基づく分類では、説明ができない事例が多々存在する。先ほどの例でいえば、敗戦という未だに生じてはいない「未来」の出来事は、具体的な対象であるのか、それとも違うのだろうか。もっといえば、研究者がそのように対象の有無に基づく区別をしたところで、現実を生きる我々がそのような区別に則る必要性は存在せず、また、現実のリアリティを反映しているとも言い難い。

2 勉強会の進展

このように、本研究班では勉強会の結果として、恐怖と不安とを峻別することの難しさと、峻別することの必要性を発見することになった。恐怖と不安を対象とした社会学的な先行研究としては、奥井智之の『恐怖と不安の社会学』をあげることができる。だが、奥井の研究においても恐怖と不安は混同されており、恐怖と不安を峻別するという目的からすると、満足のいくものではなかった。もっとも、奥井の研究は「恐怖や不安といったものを、どのようにして社会学的に研究することが可能か」という試論的な側面も強く、「恐怖と不安を峻別出来ていない」という点のみで批判することはフェアではないだろう。

そこで、本研究班では「時間」というものに焦点をあて、恐怖と不安を分類することはできないだろうか、という議論を展開するに至ったのである。つまり、恐怖とは時間的に近接した事象に対して、そして不安とは時間的に遠隔した事象に対して用いられる表現として理解すべきではないだろうか。人々はまだ起こっていないことに不安し、起こりつつ、あるいは、起こっていることに対し恐怖するのではないか、という議論である。

例えば、若林幹夫は『未来の社会学』において、「小さな未来への強迫」(若林 2014: 221) という表現を用いている。この表現によって若林が意図したものは、現在の状況を材料として想像された未来の可能性が、リスクとして個人に降りかかっているという事態である。リスクとは未来の可能性であり、それに対して人びとは常に不安を抱いているというのである。リスクの具体的な内実は、親の介護や年金、離婚といったように処々に及ぶが、いずれにしろ共通しているのは、それらが直近の出来事ではないという点だ。若林のこれらの議論からは、恐怖や不安を時間的な距離という観点から考察することの萌芽が読み取れるのではないだろうか。

そして、社会学的な研究とは、研究者が全くの0から新たな認識枠組みを作り出すようなものではなく、その社会に暮らす人びとによって語られ、既述されたものから二次的に認識枠組みを作り出す知的営みである。であるのならば、人々がそれを鑑賞することで、恐怖や不安を現に抱いてしまう映画や小説から、逆説的に恐怖や不安を読み解くことも十分に可能であろう。『ヒトラー～最期の12日間～』において描き出される恐怖と不安は確かに理解できるものの、日常生活からはやや隔たった空間に存在する恐怖と不安であった。それに対し、デヴィッド・リンチによる『ブルーベルベット』(原題: Blue Velvet) は、日常生活に突如として現れ出る恐怖と不安を描いており、「人々の生活から考察する」という我々の関心を深めるという点においては有意義であった。

勉強会においてなされた『ブルーベルベット』に関する研究の具体的な内容については、本紙別所にて掲載されている、コラムを参照していただきたい。なお、該当コラムにおいては本報告に至るまでになされた研究内容が記述されており、時間という論点には明示的には触れていない。

3 今後の予定

本研究班発足当初は、メディアを通じて表現されたもののみを表象として取り扱っていた。しかし、社会学において表象という言葉が意味するものはその限りではない。例えば「いじめ」という言葉を我々は日常的に用いるが、この時「いじめ」という言葉は表象として機能している。つまり、現実には日々いじめは生じ続けており、「いじめ」という言葉でその全体を捉えることは不可能である。にもかかわらず、「いじめ」という言葉でコミュニケーションが可能となるのは、「いじめ」が個別具体的・現実的な側面をそぎ落とした、いじめの表象として機能しているからである。あるいは、現実世界における恐怖と不安を表象（代表）するものとして、いじめをとらえることも可能であろう。

上記の展開を経て、本研究班は、2018年2月に改めて研究会を開催する予定である。具体的には、表象としての「いじめ」をテーマに取り上げ、暴力を鍵として恐怖と不安に関する社会学的考察を深めていくことになる。

時間と恐怖と不安に関する具体的な論考は、研究会開催後に展開する予定である。

【参考文献】

- 奥井智之, 2014, 『恐怖と不安の社会学』弘文社.
若林幹夫, 2014, 『未来の社会学』河出書房新社.